

史 館 事 記

川口長孺著。『大日本史』の編さんを行っていた水戸藩の修史局（彰考館。江戸と水戸双方にあり、前者を江館、後者を水館と称していた）における業務記録。写本（筆写者、筆写年次ともに不詳）。漢文。一冊。

著者の川口長孺は、字を嬰卿、通称を助九郎、号を緑野。長孺はその名。水戸の人。寛政五（一七九三）年、江館に入り、文化五（一八〇八）年、総裁代役となり、同十二年総裁に昇進。文政五（一八二二）、「失行」（『水戸藩修史事略』）ある故をもって水戸に屏居。

同十年、藩命で再び江館に入り、総裁に復したが、この人事に会沢正志斎・藤田東湖ら、いわゆる改革派が強硬に反対を唱えつづけたため、同十二年五月ついに辞任して水戸に帰る。天保元年（一八三〇）、に書院番組、同五年小納戸役。同六年六月没。六十三歳。

『史館事記』は、その序文（文政十一年二月）によれば、彰考館の、「旧事を記して以て自ら遺忘に備へ、且つは以て後人に^{のこ}貽さんと欲し、史局（彰考館）の簿書に拠」り、文政十年十一月中旬に、文化三年の出来事から筆をおこした。しかし、わずかに一年間を年月にかけて記したところで江戸小石川の藩邸が火災で類焼、彰考館の帳簿がことごとく灰燼に帰したので、翌十一年の春、公務の暇にみずから筆記しておいた家事の帳簿を繰り、これには公務にかかわることもあるので、年月を考証し、暗記するところも記して、文化八年まで書き継いだ。以後も書くつもりでいたが、家の転居のさい、帳簿を損傷

したため、この年をもってしばらく筆をおくこととした、という。

以上のように、『史館事記』は、文化三年正月二十四日にはじまり、同八年十一月に終わる。その全文は刊本『大日本史』（昭和四年〈一九二九〉年大日本雄弁会刊）の「後付」に収録されている。しかし、菅文庫所収の本書は、序文から文化四年五月七日の条の書き出しの部分までしか書写されていない。それは全体の分量の約三分の一ほどである。

文化三年から四年にかけては、前年十一月一日に死去した六代藩主徳川^{はるもり}治保（文公）のあとをついだ七代^{はるとし}治紀（武公）の初政に当たっていた。そのため、本書の記述は、

- （一）治紀あるいは藩の用達（執政）・若年寄（参政）と、総裁の川口ならびに藤田幽谷（編修、四年から総裁）・高橋担室（広備。同上）との、『大日本史』編さん事業の進展をはかるための問答。
- （二）治紀から『大日本史』編さんに全力を尽くすよう命を受けた川口らが、その校訂を進めるとともに、新稿の志類（『礼儀志』など）を治紀の閲覧に供するなどの修史業務。
- （三）川口らが治紀に『大日本史』の講義を行ない、読書に侍し、あるいは十一歳の世子^{せいし}（のちの八代藩主^{なりのふ} 斉脩）への進講といった教育活動。
- （四）彰考館の総裁、総裁代役を含む藩の人事。

などが主なものであるが、とくに注目をひくのは盲目の国学者塙保己一が『大日本史』の校訂に尽力して

いる姿を具体的に記している次の箇所である。

（文化三年六月）六日、一正（藤田幽谷）・^{のぶゆき}延干（青山拙斎）水戸に還り、後、広備・長孺対校す。此の日、宇多帝本紀を始む。紀首の旧本、世継物語に拠り、光孝帝竜潜の時、諸子をして其の志を言はしむ。宇多帝は願くは東宮に居り、以て大宝を嗣がんの事を載す。誦読の間、塙保己一傍聴して曰く、『世継の記する所は、蓋し日本紀崇神帝の語を模す。恐らくは実事に非ざらん』と。因りて之を下文に考ふるに、宇多の位を嗣げるは、全く基経の意に出で、必ず光孝の志に非ず。且つ宇多帝は幼より心を釈門（仏教）に帰す。帝も亦登極の志無し。蓋し基経其の制し易きを利して援立せるのみ。世継の説は藤氏の為に粉飾せるなり、保己一の説、識見あり。是に於て此の一条を刪し、注文参考に載せ、其の非を弁ず。

この記事につづけて、塙の博識ぶりと、総裁立原翠軒が塙を水戸藩に推挙して、はじめ『源平盛衰記』の、ついで『大日本史』そのものの校訂に当らせ、すこぶる有益だったことを記している。

塙は、寛政元（一七八九）から彼の死去する文政四年までの実に三十三年の間、水戸藩修史事業を助け、その功まことに大なるものがあつたのである。

水戸藩の修史事業の経過については、藤田幽谷の『修史始末』が明暦三年（一六五七）の開始から寛政九年秋までを、ついで岡崎正忠の『修史復古紀略』が同八年八月から文化十二年十月の治保死去までを記し、この『史館事記』が、前述のように文化三年から同八年までを扱

い、その後栗田勤の『水藩修史事略』が文化十二年から事業の完了する明治三十九年までを書き継ぐことになる。したがって、『史館事記』は、比較的短期間の記述とはいえ、これによって修史事業の大要を切れ目なく理解できるわけで、その点に『史館事記』の意義があるといえよう。

なお、『史館事記』の文化六年正月から二月十二日にかけての記述の中には、『大日本史』編さん史上の重大問題である論賛を削除するに至る経緯が記されているのであるが、本書は前述のように四年五月までしか書写されていないため、その部分をみることはできない。

（教育学部教授 鈴木暎一）